

博士論文要旨

1. 研究目的

生活者として壮年期・中年期にある女性が入院治療を余儀なくされた際に抱く気がかりと、気がかりへの対処に関する関係者や状況との相互作用、プロセスによる気がかりへの捉え方とその対処の変化を明らかにし、生活者としての壮年期・中年期にある女性への看護の示唆を得ることを目的とした。

2. 研究方法

研究協力者は、①その疾患での初めての入院体験者、②退院後2ヶ月以上から1年程度の者、③現在、次の入院の具体的な予定がない者、④25歳から65歳未満の女性とした。研究協力者の募集は、関東圏内にある生活者を対象とする健康支援サービスを提供している施設で行った。データ収集は、半構成的面接法により同意を得た上でICレコーダーに録音し、原則1回、1回60分程度とした。分析は、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる継続的比較分析を用いた。

3. 倫理的配慮

本研究は、聖路加看護大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号10-059）を受けて行った。

4. 結果

研究協力者は21名で、平均年齢は46.6歳であった。診断名はがんのものが10名、がん以外のもの11名であった。入院目的は、20名が手術療法、1名が内科的療法だった。入院期間は、2日から24日間の範囲で平均在院日数は7.7日であった。

対象女性は、医師より病名を告知され入院の必要性を示されたことを【病名を告げられ入院治療を迫られる衝撃】と受け止め、これまでの生活を継続するために必要な命や機能、自己像、時間、貯蓄という【今あるものを失う恐怖】という自分に焦点をおいた気がかりと、これまでの生活で自分の役割として強く認識していた子育て、介護、家事、仕事という他者との役割関係が中断されることで、【迷惑をかける申し訳なさ】という他者との役割関係に焦点をおいた気のかりの2つが出現した。

対象女性は、その2つの気がかりを抱くことで、入院治療の必要性を告げられる以前と同じ自分の生活スタイルを送り続けようとする「変えたくない生活へのしがみつき」がみられた。しかし、対象女性は、医師より病名を告知されて入院の必要性を示されることで、入院治療の必要性を告げられる以前の自分の生活スタイルで子育て、介護、家事、仕事を継続できない現実があり、「変えざるを得ない生活への諦め」が生じていた。対象女性は、消えることのない2つの気がかりを抱えながら、「変えたくない生活へのしがみつき」と「変えざるを得ない生活への諦め」を繰り返し、これまでの自分の生活スタイルを変え、新たな生活スタイルを再構築するという【生活者としての生活を再構築し続ける】ことをしていた。そのプロセスで、これまでの生活が変わっても、親として、子どもとして、社会で働く人として、女性としての自分は存在し続けられるといった「私は私であり続けられるという納得」が本人の中で生まれていた。その過程に至った対象女性は、入院治療という避けられない現実に向きあった際に、主体的な治療参加する姿勢がみられていた。

5. 結論

入院治療を余儀なくされることは、壮年期・中年期にある女性にとって、【今あるものを失う恐怖】と【迷惑をかける申し訳なさ】という気がかりを伴う生活上の危機であった。また、壮年期・中年期にある女性は、入院治療の必要性を示される衝撃によって出現した2つの気がかりをもち、生活者としての生活を再構築し続けながら、主体的な入院治療の参加への姿勢に向かっていた。看護職は壮年期・中年期の女性の気がかりを理解した上で、対象女性が行う生活者としての生活への再構築のプロセスに対して、自分自身が肯定的に評価できるように支援することが、効果的な入院治療への参加に繋がっていくのではないかと推察された。また、対象の持つ社会的側面と、本人の捉え方に関する情報が重要であることが示唆された。